

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 29 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720241

研究課題名(和文)基本外来語の談話構成機能に関するコーパス言語学的研究

研究課題名(英文)Corpus-based Research on Discourse-Organizing Function of Japanese Basic Loanwords

研究代表者

金 愛蘭(KIM, Eran)

東京外国語大学・留学生日本語教育センター・講師

研究者番号：90466227

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀後半の新聞記事を資料として抽象的な事柄を表す外来語が基本語化していく過程を歴史的・計量的に記述し、その要因を文章論的観点から明らかにするものである。自作の通時的新聞コーパスを整備し外来語とその類義語の用例データベースを作成した上で、文章中の外来語の機能(語彙的結束性にかかわる再叙等)とその通時的变化について調査した。連体修飾節構造及び指示語句の中において外来語は「(要約や名づけ等の)とらえ直し」機能を獲得・拡大させたことを明らかにし、20世紀後半の新聞にみられる「抽象的な外来語の基本語化」現象が外来語の文章構成機能の獲得・拡大を言語内的な要因として生じている可能性を提示した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to clarify the factors on "inclusion of abstract loanwords into the basic words" through historical and quantitative investigations from the viewpoint of text linguistics. First of all, a diachronic corpus of the Japanese newspaper texts in the second half of the 20th century have been constructed. Secondly, by using the corpus, a database of abstract loanwords and those synonyms have been created. Thirdly, several investigations by means of the database have been carried out. Finally, it was clarified that acquisition and expansion of discourse-organizing function of loanwords have caused "inclusion of abstract loanwords into the basic words."

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：談話構成機能 通時コーパス 外来語 基本語 基本語彙 基本語化 文章 新聞

1. 研究開始当初の背景

従来の外来語研究は、外来語を周辺のなもの、ものめずらしいもの、分かりにくいもの、日本語を乱すものとしてとらえ、その「よそ者の」な性格・特徴を明らかにしようとしてきた。しかし、いまや、外来語は、和語や漢語が担っていた基本語彙の中に少なからず入り込み、日本語の語彙をその中心部においても変えようとしてつづつある。とくに、抽象的な外来語の基本語化は、生活の近代化という言葉外的な条件によって基本語化したと考えられる具体名詞の外来語と違って、今まで和語や漢語が担っていた文章・談話の骨組みを成す語群に外来語が進出していることを意味している。

本研究は、20世紀後半の新聞における抽象的な外来語の基本語化現象を、それら基本外来語の新聞文章における文章論的な機能の獲得という側面から明らかにしようとするものである。従来の外来語研究においては、このような文章論的なアプローチを採ったものはなく、文章論の側においても、和語や漢語について触れているものは散見するが、外来語の「談話構成機能」に言及したものはない。抽象的な外来語の基本語化については、語彙論(語種論)的な検討だけではなく、文章論的な検討が加えられる必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、20世紀後半の新聞記事を資料として、抽象的な事柄を表す外来語が基本語化していく過程を、歴史的・計量的に記述し、その要因を文章論的な観点から明らかにする。具体的には、まず、自ら設計・作成した通時的な新聞コーパスによる語彙調査の結果を整備し、その結果から20世紀後半に基本語化した抽象的な外来語のリストを作成する。次いで、上記コーパスを利用して、外来語とその類義語の用例データベースを作成し、記事別に談話構成機能の分類を行う。最後に、それらの調査結果をもとに、20世紀後半の新聞記事における「抽象的な外来語の基本語化」現象の要因を、文章における談話構成機能の観点から明らかにする。

3. 研究の方法

本研究では、20世紀後半の新聞において基本語化したと考えられる外来語について、そ

の談話構成機能の獲得過程を明らかにし、それと基本語化との関係を明らかにすることをめざす。

談話構成機能とは、Halliday and Hasan (1976)のいう「語彙的結束性」や McCarthy (1992)のいう「談話構成語」等にかかわる機能である。それによれば、「テキスト内のある要素と、その要素の解釈に欠くことのできない他の要素との間の意味的な関係である」結束性の語彙的な表示である「再叙(語彙的指示の同一性)」には、同一語の繰り返し、同義語や近似同義語、上位語、一般名詞(general noun)、人称指示語等があるとされるが、たとえば「トラブル」という外来語は、このうちの上位語および一般名詞としての特徴をもっていると考えられる。実際、通時的な新聞コーパスからは、以下のような例が得られる。

(用例1) 大阪地裁で23日あった殺人事件の論告求刑公判(K裁判長)で、殺された娘の遺影を手に傍聴していた母親(53)が、持ち込んだコードで被告の男性(20)の首を絞めたり、遺影の額のガラスを割って破片を法廷に投げつけたりする騒ぎがあった。関係者にけがはなかった。刑事裁判での遺影の持ち込みは、先月から各地で相次いで許可されているが、こうした「トラブル」は初めて。大阪地裁は「遺族としての気持ちの高ぶりもある。法的に事件にするかどうかは分からない」と話している。[2000年10月24日朝刊社会面]

ここで、「トラブル」は、「こうした」とともに、(直接には)先行する「騒ぎ」と(間接的には)その内容節(「殺された娘の～投げつけたりする」)を指示するとともに、それを上位概念(「トラブル」)に言い換えて再表現し、さらに、自らは主題となって「初めて」という叙述につながっていくという文章展開上の機能を発揮している。つまり、「トラブル」は、この種(指示+再表現+主題化)の文章構成機能を発揮するために上位語として新聞に多用され、その結果として基本語化したという可能性がある。

本研究では、このような談話構成機能がいつごろから、また、どのように獲得されてきたのかを明らかにすることが、基本語化の要因を考える上で有効な観点・方法になるもの

と考えている。

4. 研究成果

(1)資料の整備

最初に、自ら作成した通時的新聞コーパスに紙面情報等を付加して、タグ付きコーパスとして整備した。タグ付けは、見出しや本文、紙面情報等がわかるよう複数のタグを用意した。自作の通時的新聞コーパスについては、金(2011)を参照されたい。

次に、通時的新聞コーパスを、国立国語研究所が開発した全文検索システム「ひまわり」を利用して、KWIC検索のできるデータベースに加工した。

(2)個別の外来語の基本語化の記述 - 動名詞(サ変動詞)の場合 -

20世紀後半の新聞における「抽象的な外来語の基本語化」は、「トラブル」「ケース」といった純粹の名詞(金 2006a・2006b)だけでなく、「チェック(する)」「カット(する)」「スタート(する)」といった動名詞にも及んでいる。

『CD- 毎日新聞 2000 データ集』(大阪版含む)に用いられている外来語動名詞を、出現頻度順に取り出し、その紙面(記事種別)ごとの使用頻度を調べると、中には「リード」「マーク」といったスポーツ面に特徴的な語もあるが、「スタート」「チェック」「イメージ」など全紙面にわたって幅広く使われる語も確認できる。

そこで、全紙面にわたって幅広く使われる動名詞のうち、「チェック」を例に、その基本語化について調査を行った(詳細は、金 2013)。具体的には、上述の「通時的新聞コーパス」のデータベースを用いて、「チェック」の意味・用法の変化を明らかにするとともに、別に行った全国規模の意識調査の結果も検討した。その結果、「チェック」は、20世紀後半を通して、使用量を増加させるだけでなく、意味と用法の両面において拡大し、基本語化してきたことがわかった。とくに、意味の拡大については、「チェック」の意識調査の結果とも符合することが確認された。

(3)談話構成機能の観点からみた「抽象的な外来語の基本語化」

語彙論的な検討に加え、文章論的な検討を個別の外来語について行うには、それに先だって、「抽象的な意味を表す外来語の基本語化に文章構成機能の獲得が関係する」という見通しの妥当性を確認しておく必要がある。そこで、まず、外来語の文章構成機能の獲得と抽象的な外来語の増加傾向とが相関することを示す事実を、コーパス言語学的な調査によって発見・提示した。

調査1: 指示語句

この調査では、「指示詞+外来語」という形式に注目する。この形式は、文章の前方の語句を指示しつつそれを名詞化し、かつ、後方へと展開するもので、文章構成機能を担うことが確実な形式である。ただし、指示詞は新聞文章で最も多用される「この」とし、外来語も単純語であるものに限定した(合成語や句、固有名詞は除く。以下、「コノ語句」という)。その際とくに注目するのは、外来語による前方語句の再表現の仕方であるが、コノ語句には、前方語句の再表現の仕方において、大きく三つの異なる方式が認められる。

A. 繰り返し

文章の前方にある外来語と同じ外来語をコノ語句でも繰り返し用いるタイプ。同じ語句を繰り返して使うことが基本だが、前方複合語の類概念を表す部分(例:「初心者マーク」の「マーク」)のみを用いる場合も、これに含める。

(用例2) また大型人工衛星には予備の燃料を持ったエンジン¹を装備することもできる。このエンジン²によって人工衛星が大気の大気層の中に入る時、衛星の速度を落としそれで燃焼を防ぐことができる。[1960年2月5日外電]

(用例3) アルバイトでためた金で安い中古車¹を買い、初心者マーク²をつけて規定通り走って、また驚いた。世の中の名ドライバーはこのマーク³を軽べつするようである。[1980年1月15日投書]

B. 言い換え

文章の前方にある語句を別の外来語に言い換えてコノ語句に用いるタイプ。これには、「季節」に対する「シーズン」のように同義

語・類義語である場合と、「喘息」に対する「アレルギー」のように上位語である場合とがある。

(用例 4) うっとうしい梅雨期、ひきつづいてやって来る暑い夏—どちらも食欲の減退しがちで心身ともにゲンナリする季節だ。食欲の衰えは体力を低下させ病気を起こしやすくする。しのぎにくいこのシーズンを健康に乗切の方法はないものか。[1970年6月15日健康]

(用例 5) わたしは遺伝的に喘息があって、若いときはその徴候はなかったが、戦争から帰って、喘息に苦しめられるようになった。いろんな療法をやったが、このアレルギーに対抗するものはなく、諦めるより仕方がないと観念していた。[2000年10月15日総合]

C. 捉え直し

文章の前方で述べられている叙述(事柄)を外來語一語で名詞化してコノ語句に用いるタイプ。

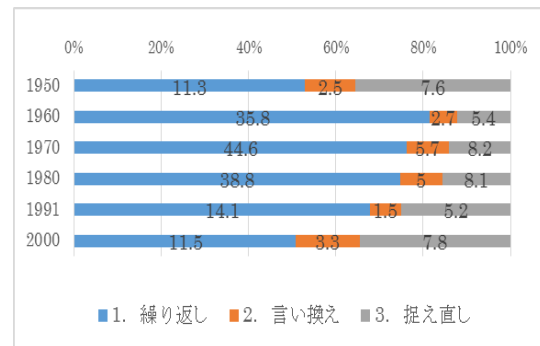
(用例 6) ローラー・ゲームがテレビで放送されたせいで、昨年は男の子の間にローラー・スケートの売れ行きが好調だった。だが、このブームもすでに峠を越したという例もある。[1970年3月15日家庭]

(用例 7) いってみれば文化財保存側が経済開発側に“調和できます”と言い寄ったようなものだ。しかし、開発側がこのプロポーズに応じるだろうか。“片思い”ではないか。今後ほんとうに文化遺産を守る戦いを...[1970年9月15日総合]

前方で述べられる事柄は、句・文・連文・段落といった語より大きな形式をとり、場合によっては複数の段落に及ぶ場合もある。書き手は、そうした事柄を外來語一語で「捉え直す」ことによって再表現し、文章を後方へと展開していく。高崎(1988)は、このタイプの「指示詞+後要素」という形式を「指示語句」と呼ぶ。

通時的新聞コーパスにおいて、これら3類に該当する(コノ語句の)外來語の量的推移(延べ)を示す図1を見ると、データの規模の小さい1950年を別にすれば、「繰り返し」が減り、「言い換え」と「捉え直し」が増え

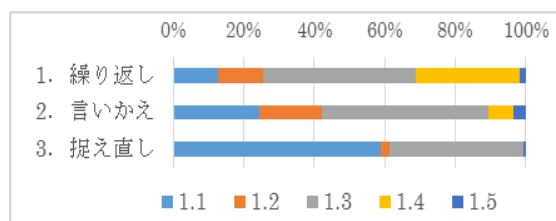
できていることがわかる。



<図1> コノ語句による再表現の方式(100万字当たりの換算値の比率)

コノ語句による再表現は、「繰り返し」<「言い換え」<「捉え直し」の順により複雑な方式になる。そして、コノ語句の再表現の方式は、20世紀後半の新聞コーパスにおいて、より単純なものから現れ、次第により複雑なものが増えるという経過をたどっている。このことは、言い換えれば、20世紀後半の新聞では、少なくともコノ語句という形式において、より複雑な文章構成機能を外來語に負わせてきた(外來語が獲得してきた)ということを示すものである。

問題は、この複雑化の過程と、抽象的な意味を表す外來語の増加とが関係をもつかということであるが、上の3類の外來語について、『分類語彙表 増補改訂版』(国立国語研究所, 2004)の大項目(部門)を用いて、その意味分野をみると(図2)、どの類も「1.3 人間活動」が4~5割を占めるが、それを別にすれば、「繰り返し」から「捉え直し」にかけて「1.1 抽象的關係」が増え、逆に、「1.4 生産物・用具」「1.2 人間活動の主体」が減っている。



<図2> コノ語句の方式別の意味分野構成比(100万字当たりの換算値)

いま、宮島(1967)にならって、「1.1 抽象的關係」と「1.3 人間活動」を抽象名詞、そ

れ以外を具体名詞とみなすなら，より複雑な文章構成の方式（機能）になるほど，抽象名詞の外来語が増え，具体名詞の外来語が減っているといえる。

調査 2：同格連体名詞

上記のコノ語句のほかに，同格連体名詞（奥津 1974）の観点からも調査を行った。同格連体名詞とは，いわゆる外の関係の連体修飾節構造で，連体修飾節の表す事柄と主名詞（被修飾名詞）とが同一（同格）の関係に立つ場合の，主名詞のことをいう。ここで，同格連体名詞は，連体修飾節の叙述内容を名詞化して再表現し，後続の文脈の叙述につなげていくという点で，指示語句とよく似た文章展開上の機能を発揮している。異なるのは，同格連体名詞は連体修飾節の直後に置かれてそれを直接受けるので，指示語句のように，指示詞を使って前方の叙述を指示する（ことを明示する）必要はないという点である。要するに，指示語句も同格連体名詞も，先行叙述の再表現（名詞化）という点では同じ文章展開上の機能を持つといってよい。

（用例 8）ただ，あまりにも流れから取り残されると，国際社会から「日本は朝鮮半島和平に逆行している」というイメージをもたれかねない。[2000 年 10 月 25 日国際]

表 1 に，年ごとの異なり語数・延べ語数（カッコ内は，100 万字あたりの換算値）と，初出の異なり語数をまとめた。これをみると，同格連体名詞の外来語は 1950 年から 70 年にかけて増え，その後は横ばいといった状況である（1991 年に減少する理由は不明）。

<表 1> 同格連体名詞の外来語

	延べ	異なり	初出
50 年	3(3.78)	3(3.78)	3
60 年	16(7.25)	10(4.53)	10
70 年	38(11.94)	27(8.48)	18
80 年	45(13.98)	24(7.46)	12
91 年	21(6.43)	15(4.59)	7
00 年	50(12.52)	24(6.01)	8

また，この調査で得られたすべての外来語について，指示語句と同様，『分類語彙表』の意味分野に基づく意味分野を調査した結

果，ほとんどの外来語が「1.1 抽象的關係」が「1.3 人間活動」に属しており，同格連体名詞の外来語の増加は，抽象名詞の外来語の増加につながるということがわかった。同格連体名詞による文章構成機能の獲得・発展もまた，抽象的な意味を表す外来語の基本語化をもたらす要因の一つであるといえる。

結論：文章構成機能の獲得による基本語化

以上，本研究では，外来語の文章構成機能の獲得・発展と抽象的な外来語の増加傾向とが相関するという事実として，指示語句と同格連体名詞という二つの形式（用法）を見出した。すなわち，抽象名詞の外来語が，この二つの形式によって再表現を核とする文章構成機能を獲得・発展させ，その使用量を増やしている事実を発見・提示したわけである。これにより，抽象的な外来語の基本語化に，語彙論的な側面だけでなく，文章構成機能という文章論的な側面も関係するという見通しの妥当性を確認することができた。

指示語句と同格連体名詞とは，いずれも，先行する叙述を名詞化して再表現し，後続の叙述につなげていくという文章展開上の機能を持つ。この機能は，Halliday and Hasan（1976）の再叙に用いられる「上位語」や「一般名詞（general noun）」，McCarthy（1992）の「談話構成語」，高崎（1988）の「指示語句の後要素」などと重なるもので，抽象的な意味をもつ語によって発揮される代表的な文章構成機能である。20 世紀後半の新聞文章は，抽象的な外来語にこうした機能を担わせ，その結果として，新聞基本語彙の中に抽象的な外来語が進出することを招いたといえる。これまで，外来語の増加は，具体名詞を中心に，言語外的な要因と結びつけて語彙論的に説明されることが多かったが，抽象的な意味を表す外来語については，文章論的な説明を加えることも必要となり，また，可能であることが，本研究の調査結果により明らかになったといえる。

【引用文献】

- ・奥津敬一郎（1974）『生成日本文法論—名詞句の構造—』大修館書店
- ・金愛蘭（2006a）「外来語『トラブル』の基本語化 - 20 世紀後半の新聞記事における - 」『日本語の研究』2-2，日本語学会

- ・金愛蘭 (2006b) 「新聞の基本外来語『ケース』の意味・用法 - 類義語『事例』『例』『場合』との比較 - 」『計量国語学』25-5, 計量国語学会
- ・金愛蘭 (2011) 『20 世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化』阪大日本語研究別冊 3, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- ・金愛蘭 (2013) 「外来語動名詞『チェック』の基本語化 - 通時的新聞コーパス調査と意識調査の結果から - 」相澤正夫編『現代日本語の動態研究』おうふう
- ・国立国語研究所 (2004) 『分類語彙表 増補改訂版』国立国語研究所
- ・高崎みどり (1988) 「文章展開における“指示語句”の機能」『国文学 言語と文芸』103 号
- ・宮島達夫 (1967) 「現代語いの形成」『ことばの研究 第 3 集』国立国語研究所
- ・Halliday, M.A.K. and Hasan, R. (1976) Cohesion in English. London. Longman [安藤貞雄ほか訳『テキストはどのように構成されるか』ひつじ書房, 1997]
- ・McCarthy, M. (1992) Discourse Analysis for Language Teachers. Cambridge Language Teaching Library. CUP. [安藤貞雄・加藤克美訳『語学教師のための談話分析』大修館書店, 1995]

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

- 金愛蘭 (2012) 「日本語の基本語彙に入り込む外来語」『日本語学』, 査読無, 31 巻 3 号

〔学会発表〕(計 4 件)

- 金愛蘭 (2013) 「文法・文章機能からみた外来語の基本語化」Japanese Language Variation and Change Conference2013, 2013 年 3 月 20 日, 於国立国語研究所
- 金愛蘭 (2013) 「談話構成機能からみた外来語の基本語化—通時的新聞コーパスを資料に—」第 3 回コーパス日本語学ワークショップ, 2013 年 2 月 28 日, 於国立国語研究所
- 金愛蘭・石井正彦 (2012) 「同格連体名詞

の外来語 - 文法機能からみた外来語の基本語化 - 」韓国日本語学会, 2012 年 3 月 24 日, 於(韓国)サンミョン大学
 金愛蘭 (2011) 「外来語動詞『チェックする』の基本語化 - 20 世紀後半の通時的新聞コーパスを用いて - 」計量国語学会, 2011 年 9 月 17 日, 於国立国語研究所

〔図書〕(計 2 件)

- 金愛蘭 (2013) 「外来語動名詞『チェック』の基本語化 - 通時的新聞コーパス調査と意識調査の結果から - 」相澤正夫編『現代日本語の動態研究』おうふう
- 金愛蘭 (2012) 「外来語の基本語化」陣内正敬・田中牧郎・相澤正夫編『外来語研究の新展開』おうふう

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

- 金 愛蘭 (KIM Eran)
- 東京外国語大学・留学生日本語教育センター・講師
- 研究者番号 : 90466227